
東方吸血鬼

ふれいむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方吸血鬼

【Nコード】

N5449Z

【作者名】

ふれいむ

【あらすじ】

彼は世界で最後の吸血鬼だった。彼の力は皆から恐れられ、すべての人間から追われた。彼は世界から捨てられて、彼も世界を捨てた。そして彼は自ら幻想の存在となった。

ついた先は遙か昔、彼は第二の人生をどう生きる？

これは彼が世界に、人々の心に受け入れられていく物語。

世界を捨てた彼は自ら幻想の存在となる

俺には力があつた、人を超えた力があつた。圧倒的な強さ、子供が持つには大きすぎる、絶対という言葉で形容されてもおかしくはない力を持っていた。正確には、もともと持っていた力と、与えられた力。

けれどもそれで手にするものは？ 何もなかった。あつたのは俺を異端扱いする眼だけ。

ただ忌み嫌われて、追われて、居場所がなくなって。どうしようもなくなくなって逃げた。

それを、みんなは煙たがるように自分たちから遠ざけた、俺は一人だった。

この原因はなぜか？ 俺が吸血鬼だからだ。既におとぎ話となっている存在。俺はそんな存在であつた。

俺は十四歳の冬の日、この世の最後の吸血鬼になった。

西暦4039年、今年で俺は2050歳。既に成長は中学生のうちに止まり、老化も止まる。

翼が生えてきたのはいつだったか、俺の今までの人生を血で塗るかのような深紅の翼。爪も牙も鋭くなり。日光、流水、純銀、同時に弱点も生まれた。

黒く、地面につくほどの長いコート。顔を隠すフード。ただし、翼を通す穴だけは開いていた。

それは、俺が夜に紛れる為の。黒に染まるためのものだった。

左頬の金色の痣、三つ巴を描くそれは吸血鬼の証。レミリアにはこんなものないが……理由はわからない。

世界が俺を捨てたように、俺も世界を捨てた。

俺は遙か昔、とある存在と出会った。

東方projectというゲームの世界、きつかけはとうに忘れてしまったが。

「幻想郷はすべてを受け入れる」、その言葉は彼にとって何とも言えない響きを持っていた。

もし、これが本当にあるものだったなら……俺だって受け入れてもらえる、異端として追いついてるのではなく、一つの存在として受け入れてもらえる。それを夢見てた。

吸血鬼が実際に受け入れられている世界、俺は望んでいた。

そう、こうして2000年間の間。俺はすべてに忘れ去られるように、日の当たらないところで死に近い生活をしていた。

もし、それが本当に存在するものだとわかった時は、どれだけ感涙に浸ったことか。

俺は、その理想郷を目指すようになった、誰でもない、自分の居場所を求めて……

そしてある日、俺はたどり着いた。全てを受け入れる理想郷への扉を見つけた。

そして、今夜が決行の日。

俺は自ら幻想への扉を開く、不可視にて、その存在が絶対な。それを

その日、世界から一人の青年が、幻想の存在となった。

気がつけば俺は見知らぬ場所にいた。今は夜か、星空がきれいだ、俺はこのままこの輝きを見ないで、束縛された永遠をただ生きるだけの存在として生きるはずだった。その輪廻から俺は抜け出した。俺はたどり着いたんだ。

ここは神社の境内か。目の前に建物があるのに歩き出せない。けれどもここは幻想郷のどこだろう？ どこかで見たことがあるような気がする。しかし考える暇を時は与えてくれなかった。

疲れという抵抗不可のものが、俺に襲いかかる。おれはその場に崩れ落ち、眠りに落ちた……………

傍に、憧れの存在を目指した。黒い日傘が音を立てて落ちた。装飾も何もないシンプルなそれは、彼の性格を物語っていた。

そして、入れ違いになるように神社の障子が開かれ、彼を見つけ出し、中へと運び込んだ。

彼の日傘を見て、不思議には思ったけれども考えないことにした。ただ、彼を保護したのであった。

温かい、ぬくもりを感じる、これが遥か昔に俺に向けられなくなった感情なのか？

今ではそれさえもわからない。ここはどこなんだ？

冷静になって今の状況を見ってみる、ここは……………おそらくさっきの神社の中であろう、どことなくそれらしい雰囲気漂っている……………足音が聞こえるな、俺を助けてくれた人であろうか？ だとしたら助かった。

あの日差しの中に取り残されていたら俺は今頃灰になっていただろう。これは、俺が受け入れられたということか。なんだか嬉しいな、涙が出そうだ。こういう風に泣きそうになったのは何年振りだろう？

俺は、これを求めていたのか。しかし、みつともない姿を見せるのは少し嫌な感じがするな、堂々としておこうか。

そうして部屋に入ってきたのは、俺の予想もしない人物だったけど。そう……

「（諏訪子様……だと……）」

そう、どこからどう見てもあの東方の洩矢諏訪子だったのだから。驚きを通り越す。

「目が覚めたみたいだね、元気かい？」

「ああ、助けてくれて感謝する」

ああ、さすがにいきなり名前で呼ぶわけにはいかないからってなんて言おうか考えてたら……てんぱって無愛想になってしまった。

「私は洩矢諏訪子、あんたはなんていうの？」

「俺か？ 人間だったころの名前は千年以上も前に捨てた。それ以来名前なんか使う機会なかったし、そんなものはない」

諏訪子は驚き、特に千年のところで大きく驚いた。確かに俺はかなり年上なんだろうけど。未来人だけ。そしておそらく興味本位で聞いてきたのだろう。どうしてそんなことになったのかな。

「ねえ、よかつたらあんたについて詳しく教えてくれない？ お近づきのしるしに」

「別にかまわないけど、あまり気分がいい話とはお世辞にも言えない。それでもいいのか？」

それに本当のことをすべて話すのはできない、ここが東方という世界だということに関しては本人たちが知ってはいけないことだろう。なぜだかそれだけはわかる。

「別にいいよ、話してもらえるだけでありがたいんだから」

俺は少し間をおいて、ゆっくりと全てのことを話しだした。

多少変えてはいるが、東方の存在を知らず、気が付いたらここにいたということにしておけばいいだろう。それでも十分筋は通った話にはなる。さあ、これが俺の腐りきった人生さ。

長い間話した、醜いことをすべて吐き散らした、残ったのは空っぽの器だけだった。

そして、諏訪子がゆっくりと口を開いた。

「じゃあさ、よくわからないけど、こっちでみんなに受け入れてもらえばいいんじゃない？ 最低でも私はあんたの味方でいてあげるからさ」

「そうか、ありがとう」

満足した様子で、彼は笑みを浮かべた。それは、彼の人生の中で、

一番綺麗なものだった。

「じゃあ教えてくれないか？ 今度は君の事を」

彼の大きな疑問、それは、ここが守矢神社なら本来いるべきあとの二人がいないこと。彼はそれを自然に聞き出そうとした。そして得た答えはともではないが考えられないものだった。

ここは、幻想郷ができた時代よりはるか昔、諏訪大戦よりも少し昔であったのだから。

彼は驚きはしたが、悲しみはしなかった。だって彼が得られる結果はどちらでも変わりはなかったのだから。

「とりあえず、うちで暮らしていかないかい。あんたがいると退屈しなさそうだ」

言葉の奥には、同情とはまた違う意味が込められていた。神と人間との差を理解している彼女だからわかる、種族の違いという壁の辛さ。それを彼に感じたからだった。

「そうか、だったら好意に甘えろとしよう。これからよろしく頼む。わかっているとは思うが、精神が死に切った世捨て吸血鬼だが、それなりに役には立つだろう」

自分で自傷していても、何も感じない。それは成長なのか退化なのか？

「じゃあさ、名前を決めようよ。ここで暮すんだからあんたじゃ不便だしさ。どうだい、自分でかっこいい名前でもつけてみたらどうだい？」

「名前か、考えたことはあまりなかったな………いつそのことこの吸血鬼としての力からとってしまおうか。そうだな、あかはね紅羽きり霧、こう名乗らせてもらうか。自分という吸血鬼はここにいるという意味としておこう。この名前が俺の存在の証明となるように」

「いい名前じゃないか、じゃあ早速信頼の意味でご飯にしよう。何か食べたいものはあるかい？」

……正直に言ったらまずいよなあ、人間の血液、できれば若い人の希望なんて。

ここは適当な動物で我慢するしかないのか。さすがに自分の領土の人間が被害にあっている顔はしないでだろう。

けどなあ、俺千年単位で血を摂取してないわけで、できれば人のやつがいいんだけどなあ。まあ贅沢は言ってられないか。

「……食べ物ならなんでもいいけど、できれば動物の血でもあるとうれしい」

「ああなるほど、仮にも吸血鬼ってことなら………今から適当に猪でも捕まえてくるから待ってて」

……… 以外に野生児な神様だったんだな、諏訪子って。まあ以外というわけでもないけど、むしろ妖精とかと一緒に遊んでそんな雰囲気あるし。

まあ昼間は迷惑かけちゃうかもしれないけど、基本夜型だし、大丈夫だろう。

さて、ここは信頼の証が来るのを待たせてもらいますか。

世界を捨てた彼は自ら幻想の存在となる（後書き）

はじめましての方ははじめまして、他の小説を読んでくださってる方はご無沙汰してます、ふれいむです。

今回は過去転生最強ものに手を出してみました。どうかこれからもよろしく願います。

感想指摘評価、なんでも待ってます！

男は自らの忌み嫌われた力を見る

食事の時間が終わった。

言った通り本当に猪を捕まえてきた諏訪子、ちなみに久しぶりに飲んだ血でテンションが上がって、一敵残らず飲み干してしまった。

とりあえず今は、案内された日光を完全にシャットアウトできるといふ部屋にいる。

そこで諏訪子とこれからのことを話し合うつもりだ。

しかしこの時代でもう日光を完全に遮ることができなんて、案外建築技術は昔っからの受け売りなのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、諏訪子が口を開いた。

「じゃあさ、とりあえず霧は夜型なわけだ、じゃあ私が寝てる間に霧が活動をして、昼間はその逆になるってことだね」

「ああ、日が沈んでいる間は俺も自由に行動できるから、今日みたいなことはしなくても大丈夫だ、適当な動物でも襲って食べてるさ」

諏訪子は一瞬迷った顔をしてから答えた。

「人間じゃないんだね」

「さすがに諏訪子の領土で他の吸血鬼を作るつもりはないさ、いや、永遠に作るつもりはない。人間の血が足りなくて、禁断症状らしきものが出たなら、適当にこっそり抜き取るさ。牙を使わずにな。まあそんなことはめったにないが」

ただ、千年以上まったく活動しないことによって今まで耐えてきたのだ、どうなるかはわからないが……

諏訪子は俺の事情を知っているだけあってすぐに納得してくれた、俺が自分と同じような境遇の人間を作りたくないということを知ってくれたのだらう。

「とりあえず、夜と昼の境目の短い時間しか話ができない。けれどもどちらか一日寝ないくらいどうってことないからな。そこは問題がないだらう」

神も吸血鬼も一日二日の徹夜でへばったりはしない。

その気になれば、諏訪子はずっと寝なくても大丈夫だらう。俺はやばくなるけれども。

とにかく、夜型と昼型の同居でも、まったく問題がないわけだ。

「じゃあさ、もしいいんなら霧の力を見せてよ。人間から追われるほどの力を見てみたいしさ」

……なるほど、確かに気になるな、という方が無理かもしれないな。けれども……いや、ここはすべてを受け入れるのだから、俺の力はむしろ知ってもらった方がいいだらう。その方がいいぞという時に役に立つかもしれない。

そのとき諏訪子は、考え事をしているときに霧の翼がびくびく動くというかわいらしい癖を見つけた。もちろん内緒にするが。いざという時にばらすつもりであるらう。

「わかった、じゃあ今夜、日が落ちたら見せてやる」

「じゃあ今はとりあえずここにいな、何かあったら呼んでちょうだい」

諏訪子は部屋から出て行った。

残されたのは静寂だった、しかし、ここは俺の隠れ住んでいた場所の静寂とは違う。あくまで静まり返る中にも、目に見えない光があった。

本当に、諏訪子の優しさに感謝する。もし境内で灰となつて一生を終えていたら、自分は浮かばれなかったであろうから。

「さて、夜まで眠っておこうか、久しぶりの夜を満喫するためにも」

俺は早速、丁寧にひかれていた布団に入って眠りについた、まだ疲れが残っていたのだろうか、あっさり眠れてしまった。

「もう日が暮れたよ、そろそろ起きたらどうだい？」

この声は……諏訪子か、もう夜だというのか。

目を開けて周りを見渡すと、窓があいているのにも関わらず、入ってくるのは太陽の光ではなく、優しい月の光であった。

「目が覚めた？ 約束の夜だよ」

ああ、そういえば俺の力を見せるといふ約束だったな、すっかり忘れていた。

「じゃあここから離れよう、一応直ぐに衰弱して死ぬ程度まで力を出せば、地形を変える程度の力はあるものでな。どこか広い所がいい」

「広いところねえ……まあついてきて」

いま俺が言ったことは本当だ、ただ俺には二つの力があり、片方は人間だったころから持っていた。万能で代償がない。これは能力ではなく俺の特殊性だ。魔法でもなく、純粋な俺の力だ。

もう一つは吸血鬼になってから手に入れた力、いわゆる「程度
の能力」だ。

代償がある代わりに超強力で山を分断する。しかし後先を考えず、全力で撃てば俺はすぐになんとかしないと死んでしまう程度に衰弱する。（吸血鬼の生命力でだ、普通の人間なら速攻死に至る）

まあ、今日はどちらも見せてやろうじゃないか。

諏訪子について行くように翼を羽ばたかせた。遅れないように飛んでいく。

久しぶりの感覚だが、体は鈍っていないようだ。これなら能力の方も大丈夫だろう。

この世界では、隠す必要もないんだ。存分に恩恵に授かるうじゃないか！

「ついたよ、これだけ広さがあれば足りるかい？」

「ああ、十分だ。じゃあ早速見せてやろうじゃないか」

俺と諏訪子は広場の真ん中にいる。この広場、天然のものらしく人の手が入っていないらしい。広さも大体20×20mくらい、十分だ。これだけあればある程度はできる。あくまである程度だが。

「じゃあまずは俺の力から見せよう。これが俺の紫黒だ」

手で空を切ると、その手に現れたのは剣、紫とも黒とも言えない色をしており、生きているかのような生々しさと光沢を感じるものだ、一応金属ではあるが、感じられる異常性という面ではどんなものでも霞んで見える。

「なんだいこれ？ 見たところ無機物みたいだけど……」

「紫黒、無限に体積を変え、自在に形を変え、適応して質量を変え、これは俺の体の一部、左手の甲から出てきているのはわかるが、詳しいことはわからない」

厨二全開だが本当にそうなんだ。紫黒は俺の自在に動く、いわば半身と言ってもいい。

この力のせいで、俺の人生は狂ったが、今こうしていられるのなら安い対価なのかもしれない。

「それじゃあもう一つは危ないから、ちょっと離れて」

諏訪子は言われたとおりに少し後ずさる、まあ俺だってそっちの方には被害が行かないようにするけどさ。

「これが俺の能力、「血を力に変える程度の能力」。自らの力の根源は、自らの血液という神秘性にある。吸血鬼にぴったりの能力だ」

自分の血液の一部を消費、自らを取り囲む霧へと姿を変える。色は俺の紫黒と同じ色だ。

これも俺の左手の甲から発せられているためであろうが……詳しい理由はわからない。

そんなことを考えているうちに、俺の体の半分が霧に包まれた。

「それが霧の地形を変える力かい？」

「ああ、これをこすりすれば地面を掘れるぞ」

左手を前につきだすと、霧がかなりの速度で地面をこすりながら前へと進んでいく、不思議と音は聞こえない。

全てが通り過ぎると、ただ3m近く掘られた溝が、端が見えないほどにどこまでも続いていた。

「できる限り抑えてこんな感じだな」

「言葉が出ないよ、それでできる限り抑えただって？ 私もそこまでやるのに結構苦労するのに……」

しかし、俺だって左手の甲から血が出てきている、もうこの部分だけ痛みになれてしまったくらいだ。

「とまあ、とにかくこれで一部だとわかってくれればいい。それに俺にはまだもう一つあるしな」

コートの中から取り出されたのは魔剣ダーインスレイヴ、一度鞘から抜けば一度生血を吸い、誰かを死に追いやるまで鞘には戻らない、その一閃は的をあやたまず、決して癒えない傷を残す。血を求める魔剣。

「これが俺が吸血鬼になったとき、最後の吸血鬼に選別をくれてやると言ってもらったものだ、一度抜けば、生血を浴びるまで決して鞘には戻らない」

「よくわからないけど、とりあえず勝手に抜いちゃあいけないのはわかったよ、けどまあそこまで力があつたなんてねえ、もう私には理解しきれないよ」

そこまでなるのか、まあそれでいいのかもしれないが。強すぎる力は持ち主を滅ぼす。

そんなものは知識としても持っていかない方がいい、そうだろう。とりあえず簡単にだが、俺の力は見せた。これで納得してもらえるのだからこれでいいだろう。

「さて、これだけ見れば十分なんだろう？ 戻ろうじゃないか」

「そつだね、まあ飛びながらも話は出来る」

俺たちは同時に飛び立ち、平行になるように速度を保った。

「ねえ、どうしてそんな力があるんだい？」

「俺にわかったら苦労はしない、だったらとうに解決しているさ、俺が人間を追われることなどなかったよ」

「そう、何か悪いこと聞いたね」

素直に謝る諏訪子、俺だってあまり触れられたくはないが、こっちはもう違うんだ。

確かに人間たち眼には異形に映って、忌み嫌われるかもしれない。けれども、諏訪子たちみたいな存在にとっては何ともないんだ、幻想郷が出来てからは、本当に人間たちからも受け入れてもらえるんだから、それまでの辛抱だ、なにも何千年か立てば時は来るんだ、それまで我慢すればいいだけの話、それに神や、妖怪たちは俺のことを認めてくれる、それで十分なのさ。

「なあ、神様やっててさ、人間の中に混じっているいろいろできたらな、とか思ったことない？」

「そりゃあるさ、私だってずっと一人なのは嫌だよ。けどまあ今まで何ともなかったんだけどね、まあ正直に言っちゃえば一緒になっ

て騒ぎたいよ。けどさ、それが出来ないから信仰と恩恵という形になっただ。私はこの理を覆してまで、壊してまでとは思わない。だってそれが皆の幸せにつながってるんだから」

……そうか、言われてみればそんな気がしなくもないな、俺は何か勘違いをしていた……というわけでもないな、だって俺のしてきたことは無駄ではなかったんだから、人間に近づこうとして、それでも人間というコミュニティから追い出されて、それでもここに来られたんだから。たどり着いたんだから。それでいいじゃないか。

俺は世界の理を変えるつもりはない、ただちょっとだけ自分が幸せになりたいだけなんだ。

「なんとなく、わかった気がするよ。ありがとう」

「お礼を言われることを何かしたっけ？ まあ素直に受け取ってえおくよ」

「そうしてくれ」

俺は今日、一つの結末と答えを得た、けれどもそれが本当に正しいのかは誰にもわからない。

けどさ、ただ一つわかるのは俺のこれからの一生は、とんでもなく面白そうだったことだ。

なんでかって？ こんなに素敵な仲間がいるんだぜ、それにさ」

「なんだから。」

「ねえ、帰ったら一杯やらないかい？」

「酒は久しぶりだな、よし乗った、俺も賛成だ」

「じゃあ少し急ごうか」

夜空に二つの影が一閃した。

縁側から、月を眺めて二人で飲む酒、少し前までは考えられなかった体験だ。

「ねえ、霧は神についてどう思う？」

「神か？ 諏訪子みたいなのが最初の知り合いだと分かんないかな」

「なかなか言うねえ」

こんな風に俺は、なんだかんだいって俺は、人間が大好きなんだ。神様だって吸血鬼だって大好きなんだ。けど、ちよつとだけ歯車が噛み合わなかっただけ。けど、俺がそれに気が付くまでに、あとどのくらいかかるのかな？

「とりあえずさ、これから一緒に暮らしていくんだ、よろしく頼むよ」

「それはこちらのセリフだ、むしろこっちが言うべきセリフだろう」

確かにね、と諏訪子が笑う。俺もつられて笑う。

けれど今気がついた。とても重要なことを忘れていた。俺には笑顔なんてものまで、枯れていたのか。

俺は今、本気で心の底から楽しいと思った、そんな思いを込めて笑った。心の底から今が楽しいと思った、だからこうやって笑顔になれた。

だからこうして、また生きる気力がわいているんだ。

「それじゃあ、遅くなったけど乾杯しよう、霧に、私に、この世界に」

「そうだな。俺もそんな気分なんだ」

もう手をつけた酒だけど、乾杯をする。俺はこうしてこの世界に受け入れられた

男は自らの忌み嫌われた力を見る（後書き）

非常に能力紹介が急展開になってしまいました、まあこれから何度も出てくるものなのでこのくらいがいいのかもしれないが。じゃないと、全部わかっていたら面白くありませんし……まあこんなものだとわかってくれればOKです。

ダーインスレイヴはそうですね、気になる方はwikiってください。まあ僕も要約して説明したんで、あれが分かっているればほとんど説明したようなものです。

これからは、素直に日常生活を書こうと思っています。

諏訪大戦とかいつ出すか考えなきゃ……（汗）

歴史は変わらなくても波紋は広がる

俺は夜を駆ける、それが俺の生き様だから。

血を求め、それが必要なことであり、自らの糧となるから。

そして、今新しい犠牲が生まれた。

「うん、鹿の血もなかなか……」

野鹿の首に口を当てて、食事を開始する霧。もちろん肉までおいしくいただく。

本当なら人間であった方がいいが、別に大丈夫なようになっている。それが二千年の歳月の力。力は強力になり、それと同時に臨機応変なものとなる。

これが毎日の彼の食事、もうすでに諏訪子のもとに住み始めて早一ヶ月。特に代わり映えない日常に退屈はなく、むしろ充実様で感じていた。

諏訪子の手合わせに何度か付き合った。神の力は強力であるが、それでも二千年の歳月を覆すほどには至らない。ただし、これには？ただし夜に限る？という一文をつければの話だが。

「なんか、ただしいケメンに限るって言われて虚しくなるのがわかる気がする……」

確かに夜の帝王である彼も、昼間はただの妖怪にすぎない。それは昔から決まりきっていることである、人間さえも認識していることだ、いまさらどうこうしようという気持ちはない。ただ、何か知ら方法があるのなら別だが、それが起こり得ないことなのは、おそらくこの世界の住人の誰よりも詳しいことだろう。それが彼の運命、すべてを知りえるものとしての定めなのだからどうしようもない。

そして今、今度は動物ではなく妖怪がその力の餌食となる瞬間がやってきた

現れたのは妖怪、姿から察するに蜘蛛の妖怪、夜中に獲物を求めて徘徊していたところ、俺という標的を見つけたということだろう。

感じられる明らかな殺意は、捕食対象にしか向けられないものだった。

ただし、相手が悪かったけれども……

「久しぶりに、全力でお相手するか。二千年のうつぶん晴らしになるといいけど……」

期待はあまりできないだろう、力はあまり感じられない。

先手を譲らせてみる、蜘蛛らしく糸をはいてくるが……俺には無意味だ、そんなもの止まって見える。

紫黒を手に纏う、形は……大きな爪にしておこう。

糸を避ければ、全速力で本体へと接近していき腹を貫く。一連の動きは洗練されたものだが、その場の対応はできないだろう、あくまで決められた型を再現しただけなんだから。

そのまま虚空へと抜けた霧の体は、今の成果などなかったかのような素振りさえ見せた。

彼にとっては当たり前の結果なのだから、仕方のないことなのだが、全力を出し切る前に終わってしまった勝負を悔やむ様子はあるが、彼にはむしろそれでよかったのかもしれない。それはなぜか？

「最近西日本の方が騒がしいらしいし、神様と戦うのならそこら辺の妖怪はオーバーキルの方がいいだろうしな」

そう、最近西日本の方で次々と先住の神たちを破り、配下に従えているという国があるという話を聞いた。間違いなく神奈子のところに違いない。

もうすぐ諏訪大戦が始まるということだ。

おそらく自分が加担しても、結果は変わらないようにはなっているのだろう。けれども今までの諏訪子に借りっぱなしの恩を返すにはこの場しかない。

自分が参加し、できるだけだけの戦果をあげること、洩矢神の評判をあげるくらいは自分にもできるだろう。おそらく一番奮闘した神として歴史に名を残せば、諏訪子もまあ、悪い気はするだろうが満更でもないだろう。

そのため、自分が大戦に参加し、歴史を覆すぎりぎりのことをするのは俺の中では最早規定事項だ。つまり神奈子に対応できる力がほしい、そのためにはそこら辺の妖怪などはオーバークイルでいて、なおかつ強敵との戦い方を磨かなければならない。なかなか複雑な悩みだが、自分には力がある、おそらくぶつつけ本番で慣れていくという戦法もありっちゃあり、というわけだ。まあそれが意味することは一つではないのだが……

要するにだ、神奈子と戦うにしても別に戦い方というものを身につける必要はないが、その代わりに現地で対応法を習得しなければならぬ。

もしかすると諏訪子と神奈子の頂上対決という可能性もあるわけで、この根回しはすべて無駄になる可能性もあるが、おそらく神奈子の味方の神様は貧弱ではあるまい。

まとめると、今の自分に必要なのは対応力だ。それだけだ。

こんなに長々と俺の戦略を読者の方々に話させてもらったがそういうことだ、まあ無駄にはなるまい。

とにかく、もうすぐ諏訪大戦が始まるということは間違いないのだ、それなりの蓄えも戦力も諏訪子を用意してある、ミシヤクジ達の強さはわからないけどもそれなりの戦力にはなるはずだ。せいぜい負け戦を全力で行うとしよう。恩人の名誉のために。

「さて、もうすぐ夜明けだし、諏訪子も起きてくるだろう。そろそろ神社にもどるとしますか」

今日も一日が始まる

いや、もちろん俺にとっては終わるだよ。勘違いしないでくれよな。

帰ったら諏訪子もう起きていて、そのことについて少し話したが、まだ先のことだと思っているようだ。

それもそつだろう、だってまだ噂が広まってくる程度のことなので、騒ぎからは遠いということだ。

とにかく、俺は眠りに就くこととしよう。

「あゝ、霧も寝ちゃったし暇だなあ」

縁側に座り、足をぶらぶらさせる諏訪子。神の威厳などそこにはどこにもなかった。

しかし、戦が確実に迫ってきているなかでの戦力強化という面の仕事はなにも怠っていない。既にミシヤクジ達もいざ戦が起これば戦ってくれるように約束してある、それは諏訪子に対する信頼の表れか、それともただ自分たちの居場所を守りたいだけか？ それは誰にもわからないことだ。

「お？ 参拝客じゃないか、朝っぱらから熱心だねえ」

こっそりとのぞき見をする諏訪子、神がそんなことしていいのかわからないが、それでも好奇心には勝てないようだ。

「どんなこと話してるのかな……？」

「国境の方の村から聞いた話んだけどさ、隣の国までついに占領されたらしいよ」

「はあ、それじゃあ西日本はほぼ全滅だなあ」

「そうそう、神様がなんとかしてくれないかねえ……」

……隣の国まで？

自分が思っていた以上にことが進んでいることに驚きを隠せない、また、ここまで迫ってきているにも関わらずあちらのことを何もつかめていない、それがどれだけ恐ろしいことかわかっている諏訪子は、眠りについたばかりの同居人にそのことを告げに走る。

強引に目を覚まさせ、寝ぼけ眼の霧に全てを話した頃にお互いの考えは一つにまとまっていた。

そう、ミシヤクジ達にこのことを伝え、全面戦争の手筈を今すぐに整えること。

自分たちは貴重な戦力であると同時に、決してかけてはならないまとめ役なのだ。その任務をこなさなくてはならない。

明日にでも諏訪大戦が始まる、霧はそう認識した、おそらく相手は奇襲を作戦としているはず、ならば目には目を、逆にこちらがしてしまえばいい。

けれども堂々と宣戦布告をしてきたならば、こちらも全力で対処する。

いつの間にか諏訪子はどこかに行ってしまったていた、おそらく国境にミシヤクジ達を集めるためだろう。

今日の夜にでも俺も移動することになる、準備ぐらいは済ませておこう。

とはいってもそんなものはないんだけどな、せいぜいたっぷり寝ておくとしようか。

それから諏訪子が返ってきたのは、夕方のことだった。

そして夜が更け、零時を回った後に俺は諏訪子にこのように伝えられた。

まず、夜になったら国境に自分たちも移動する、相手は人間以上の存在らしいから、こちらにもミシヤクジ達と俺たち二人が全戦力になるということだ。

そして夜の間に、俺には神奈子たちがいつごろ攻めてくる探ってきてほしいとのこと、おそらく俺単体を送り込むということだろう。見つかった場合はこちらからの宣戦布告でも送っておけとのこと、要するに奇襲の線をなくしたいわけだろう、それが諏訪子の考えた戦略なんだから文句は言わない。

要するに、夜限定の俺の強さを十分に利用するというわけだ、十分な戦略家ではあるのだろう、単純だが、使えるものはすべて使う精神は称賛に値するものだ。

とにかく今夜が決行の日だ。もう既にあたりは暗闇に包まれている、俺の準備次第でいつでもいいらしい。

「じゃあ今すぐにも言っておこう、早い方がいいんだろ？」

「悪いね、それじゃあ幸運を祈るよ」

俺は返事をせずに飛び立った、しかしこのままでは見つかる可能性も大きい。

俺の気配は夜に紛れる、気配遮断と同じような感じで見ていいだろう。それでも念には念を入れておくのが一番だ。

まあ、俺の五感には夜にはより一層冴えることとなる、相手はこちらを見つけるのより先にこちらから相手を見つけれられるであろう。

それよりも怖いのはいざ侵入してからだ、神奈子のような力のあるものまでごまかせるか？ それはもうかけでしかないであろう、とにかくやってみなければわからない。

さて、早速大きい気配を見つけた、しかしこちらに気づいている様子は無い。

そのまま迂回すれば気づかれることなどあるまい。

このように、俺は確実に本丸へと移動する。本丸とはいっても拠点は一つしかないわけだが。

そして俺は本拠地までたどり着いた、中には神奈子の姿も見える。俺は近くの木の枝にとまり、できるだけ気配を小さく保つ、不特定

多数の人間から逃げてきた俺にとってこのくらいはお手の物だ。

そして丁度行われている会議の内容に耳を傾ける。

なんでも明日の日が明ける前に攻め込んでくるようだ、今の時期で言ったら大体日の出の二時間前だろう。俺にとって若干有利な時間である。

その後も話の流れを聞いた、その他には特にこちらの利益となりそうな話はなく、そのままお開きとなった。

そして部屋には神奈子だけが残され、俺もそろそろ帰るとするか。

俺は再び空へと駆ける、十分もあれば諏訪子のところに戻るであろう。

俺が戻ると、諏訪子はすぐに結果を聞いてきた。

「明日の朝、日の出の二時間くらい前に攻めてくるそうだ」

「そう、だったらまだ一日あるし余裕もあるみたいだね。とにかく、あとのことは私がやっておくからもう休んでいいよ」

「わかった、じゃあそうさせてもらおうよ」

さてと、ちょっと早いけど寝ておくか、どっせ一日中戦つことにな
るかもしれないんだから。

さて、決戦は明日なわけか。せいぜい頑張るとするか

大きな戦いは大きくも小さい結果を生んだ

決戦の時はもう一時間以内にやってくる。 たった今諏訪子に起こされ、そう言われた。

どうやら思いのほか寝ていたらしい、確かにもうあたりは真っ暗、ほぼ丸一日寝ていたと言われても納得できる。 まあ速攻起こされたという線もあるのだが、さすがにそれはないだろう。

しかし吸血鬼の体のリズムってのはおかしいもんだ、早寝早起き（朝寝夕方起き）の練習でもやっとかないとだめかもな。

まあ今日に限っては好都合なわけだけれど。 日が昇ったら俺は半分無力化される、それまで万全で動けるのならばそれでいい。 一応一番の戦力なんだから、夜限定の。

「諏訪子、本当に先手を譲る気か？」

「うん、向こうは完全な奇襲だと思い込んでるはずだから、だってこっちを探るようなことは言っていなかったんでしょ？」

確かに、それもそうだけど。

「私は直接大将を狙いに行くから、霧はとにかく暴れて頂戴」

諏訪子と神奈子の一騎打ちってわけか、そうなりそうだとは思ったけどな。

「まあとにかくついてきて、何があってもすぐに対応できるようにしなくちゃならないんだから」

とにかく、作戦は諏訪子任せなんだから文句は言えない。俺は諏訪子にできるだけ手を貸すことしかできないんだから。

それから三十分ほどたった今、ついに時は来た。

向こうの軍勢には神々しさというか、すべてをひれ伏させるようなオーラがある。おそらくあれが神力であろう。つまり、オール神の軍勢というわけだ。

こちらも一応崇り神だけど……どうも一線を越えている雰囲気がある。

そして、俺たちの計画にも狂いが出てきた、それは……

先陣を切ってこちらに向かってくるガンキャノン……あれを神奈子と言わずに何という。

そう、まさかの大将が先陣を切ってきたのだから驚きである、それは自信の表れか、無鉄砲さか。おそらくは前者であろう。ここまで無敗の実力は決して馬鹿にはできないはずだ。

「諏訪子、何となく雰囲気ではわかってると思うが、あいつが大将

だ

「たしかに一番力がでかいねえ、じゃあ私はいつを狙えばいいんだ」

そういうことだ。

「じゃあ行ってくるよ、そっちもへまするんじゃないよ!」

あたりまえだ、吸血鬼なめてると痛い目見るぞ。

さてと、俺は適当に片っ端からぶっ倒せばいいんだな、守りの方はミシヤクジ達なんあとかするだろう、俺は数を減らすのが一番の仕事だ。

さてと、俺も出陣と行くか。

怪物が、解き放たれた。

迫りくる神々の軍勢に俺が先陣を切って立ち向かう。ミシヤクジ達

も俺の破壊力は聞いているみたいだから全力を出してかまわないだろう。

向き合った軍勢、一発目は俺がぶっ放す。

俺は左手の手袋を脱ぎ、体に霧をまとった。手の甲からは少しばかり血があふれる。

けれどもそんなことを気にしたりはしない、あくまで初撃を成功させることに集中する。

そして解き放つ、俺の破壊の霧を

それは全てを削り取る、すべてから削り取る。向こうの神々には悪いけど、本気を出させてもらう。俺の二千年間の集大成をここで出す。

破壊が始まった。

「なんだいなんだい、力のある奴がいるじゃないか。これは楽しみがあるねえ」

「ふん、あんたの部下たちなんか速攻かたずけられてこっちにくるよ、降伏するならいまのうちだね」

空に向き合う二人、誰も邪魔は入らない。いや、入れない。それほどまでに大将戦は他の神々の戦いとは次元が違うのだ。

無音が途切れた時が戦いの始まりである、そして静寂は途切れた。

「とりやああー………っ！」

「はああああー………っ！」

オンバシラが飛び交う、諏訪子はそれを縫うように避けながら確実に接近していく。

神同士の争いは実力的にはほぼ互角。どちらも譲らない。

幾度のやりとりが交わされただろう。一騎打ちは壮絶なものとなった。

オンバシラが諏訪子に幾本も向かう、それを諏訪子は土や岩などを使い、盾にしたり反撃したりなど、様々な駆け引きがされている。

そして一本が諏訪子の岩の盾を打ち砕く、それを慌てて避けた後、破片により身を隠しながら反撃をする。

いつしか神奈子の背後にはいくつもの岩が投擲されていた。それにギリギリまで気がつけなかった神奈子は慌てて背後にオンバシラを投擲し、相殺していく。

けれどもそれは諏訪子に背中を向けるということ、そこで登場したのは洩矢の必殺兵器。

「くられ、鉄の輪！」

諏訪子の周りから、次々と形成され飛んでいく鉄の輪、これには神奈子も回避行動をとるが自然と劣勢に傾いていくのは必然である。

諏訪子が勝利を確信したその時、形成は変わった。

神奈子が蔓を出したのだ。

蔓は鉄の輪をからめ取り、同時に諏訪子のところまで伸びていく。自慢の鉄の輪も一度勢いを失えばただの鉄の塊だ。

勝負はわからなくなった。

ミシヤクジ達は置いてきた、自分一人でどんどん敵中をぐりぬけていく。

あるものは紫黒の餌食に、あるものは能力で蹴散らした。

それでも彼はまだ、血を求める魔剣を抜いていない、いや、抜く気はないだろう。そこまですなくても自分は大丈夫、そういう絶対的

な自信があり、事実があつた。

しよせん神奈子以外の神などこんなもの、中には力の強い神がいたが霧のなかに消え去つた。

そこは彼の独壇場、邪魔する者などいなかった。

「畜生、諏訪子は劣勢か」

こちらが回ることもできるが、それでは今度正面突破が防げなくなつてしまつかもしれない、俺の目的はできるだけ拮抗した負けを用意すること。そのためにはどちらがいいか……もちろん敵の数を減らすことだ。

次の軍勢が来る、一人目が切りかかつてくるが、俺はそれを紫黒で受け流してそこから帰りうちにする。

つぎは紫黒を変形させ、ハンマーのようにして二人ほど叩き潰した。まあ神様はこんなことでは死なないが、さすがに戦闘不能にはなるだろう。

固まった相手が来たら霧を使う。吸血鬼にとって血というのは特別な意味を持つ、そこで俺の持つ血を力するという能力はとんでもない強さとなるのだ。

もちろん俺は軽めにはなつても、受け止める側にとっては必至、それでも蹴散らされてそこらじゅうに舞って行く。

このままではきりがないので、大きく控えている後ろの軍勢を丸ごと潰してしまおう。

「吹っ飛べ！」

左手の流血がひどくなる、けれどもこれくらいなんでもない。

そして渾身の力を込めて放たれた一撃は、後方に構えていた敵の軍勢の半数を消し飛ばした。

けれどもミシヤクジ達の力はたかが知れている、それに半数とはいっても元の数が多いすぎるのだ。相手の方が人数はまだ倍以上はある。

このままではまだ劣勢だろう。俺がなんとかしなければなるまい。そうでなくては負けるんだから。

「それで終わりだって言うんなら興ざめだよ」

「まだまだこれからだよ！」

とはいっても鉄の輪がすべて防がれている状態でどうやって巻き返せば……

唯一の勝機は、鉄の輪を防いでいる間はこちらに攻撃する余裕がな

いことだけど、それなら攻撃を続けて機会を待つしかないみたいだね。

とにかく全力で、あの臺の防御を抜ければ私の勝ちなんだから！

しかし、諏訪子は自分の頭上に迫るオンバシラに気がついていなかった。

霧は驚愕していた、突然諏訪子が撃墜された。そのとき取った行動は一つ。彼は諏訪子を受け止めるために翼を広げた。

結果的にそれは間に合った、諏訪子を受け止めた霧は神奈子を見つめる。

「おや、主催の登場かい？」

「よくわかったじゃねえか、俺が一番力があるって」

諏訪子をミシヤクジに預けると、俺は神奈子に立ち向かう。おそろくここで勝っても負けても結果は変わらない。けれども、圧倒的な力の前に半数を削るも敗北。よりは大将を倒して惜しくも敗北の方がいいじゃないか！

緊迫した雰囲気ができる、俺も神奈子もどうやら一発勝負で決着をつける気らしい、俺としては助かった。もう俺には時間がない。

「じゃあとつとと決着つけるとしようか」

「望むところだね、むしろそのまま逃げるんじゃないかと思ったけど……どうやら本気で来るらしいね」

俺も神奈子も既に力をためている。そしてその力は解き放たれた。

俺の霧と、神奈子の蔓が互いに一步も譲らない進展を繰り広げている。

俺の左手の甲はすでに真っ赤に染まっていた、これはさすがに終わったら狩りにでも行ってくるか。

お互いに一步も譲らない、俺だってこれ以上出力を上げたら衰弱して戦えなくなっちゃう。さすがにちよつと調子に乗りすぎたか……

そしてしばらく続いたこの勝負、決着の時がやってきた。

「残念、時間切れだ」

「どづいづことだい？ まさか今更逃げよつって魂胆じゃないよね？」

「違う、日の出だよ」

そう、地平線から少しずつ、光が見える。このままでは俺は灰になるだろう。

俺は攻撃をやめ、蔓の猛攻を避け切ると日傘をさした。

「俺の負けだ、時間内に決着をつけられなかったからな」

俺が離れてからの勝負は一気に形勢逆転があつてみている方も驚かされた。
俺一人の影響力というものがどれだけすごいのか、初めて実感できたのかもしれない。

結果的には負けた、神社は歴史通りに神奈子のものとなり、すべて収まった。

諏訪子も最初はあーだこーだ言ったけど、最後には納得して神社を明け渡した。まあそれでも神社に神が二人いる状況になっているだけに、決着としては珍しい方法なのかもしれない。

まあ結果としては同居人が一人増え、諏訪子が暇になって、信仰は神奈子が受ける。もちろん諏訪子を信仰する人もいるが。

とにかく、俺の生活はほとんど何も変わらない、あれほどの争いがあつたとしても残るのはそれだけなんだ。

神と神とは言つても、所詮はそこまでのなのかもしれない。もしかするとそうなるように仕組んだのかもしれない、それは誰にもわからない。

そして今俺は、三人で食卓を囲んでいる。これだって事実を知っているから驚かないが、普通の人間視点から見たらかなりシニールなことになってるんだろうな。

「あつ、神奈子、それ私の魚！」

「なにおう、早い者勝ちだい」

「人の皿にのってるものは早い者勝ちなんかじゃないよ！」

……騒がしいです。

けど、これが俺の望んだ日常なんだ。なんだかんだいって、俺はこ

うして受け入れられていくんだから

力という大木は確実に枝を伸ばす

「やっぱり格好いい方がいいんじゃない？」

「けどわかりやすさも大切なんじゃないのかねえ」

「俺としては気合いが入るといっつか、ズバツと決まる名前がいいな」

「それは言ってるねえ、諏訪子、言いだしっぺなんだから何かいいのだしたらどうだい？」

「神奈子だってさつきからダサいのばっかじゃないか、ネーミングセンスも何もないじゃん」

「使ってる本人がそんなものかけらもないんだし、案外シンプルに攻めてみない？」

えっ、今何をしてるのかつて？ 名前を決めてるんだよ。理由がわからないなら……とりあえずこういうことがあったってことだ

俺は「血を力に変える程度の能力」を持っている、しかし俺はそれを全然生かそうとしないで、霧を出すことにしか使っていない。

それではもつたないじゃないか、という意見を諏訪子から頂いた。確かに、俺は能力よりも紫黒の方が使いやすくてそちらに頼り気味だ。誰だって進んで大小のあるものを使おうとは思えないだろう。それに、余計なものまで壊してしまうから嫌なんだ。その点でも優れているのだから使い勝手的には最高なんだし。

「しかしなあ、新しい使い方なんてどうやったらいいと思う？」

「私に聞かれてもねえ、霧が一番わかってるんじゃないの？」

神社のことはすべて神奈子がやるようになり、必然的に諏訪子は暇になる。

なので暇つぶしも兼ねて俺の能力強化に付き合ってもらっているわけだ。

しかし、俺も本当に自分の能力がどんなものなのか理解しきれていない、大雑把な能力ほどそうなるらしいが……べつに俺の場合用途は限定されているためにそうでもないはずだ。

「たとえばさ、どんな力に変えられるのか試してみたらいいんじゃない？ いつもとは違う風に能力を使うとか」

「なるほどねえ、下手な鉄砲も数打ちゃ当たるといっけどさ。確かにその通りかもしれないねえ」

「そっいうこと」

なるほど……とりあえず軽く霧を出してみる。これくらいなら血も出てこないし痛くもない。

ここからどうにかして別の要素を加えるわけだけど……別に他の使い方があると決まったわけでもないのに気が遠くなる話だ。まあ時間はたっぷりあるのだし。何とかなるだろう、ならなかったらそれが結果だ。

「とにかくやってみることにする、危ないから一応離れて」

諏訪子が俺から離れたのを確認すると、早速取りかかる。

手探りで力の出し方を変えていく、けれどもそれは霧の発生が不安定になるだけで何の効果もなかった。

それでも思いつく限りのパターンを試してみる。俺に霊力や妖力があつたなら話は別だが、残念ながら諏訪子曰くそんなものはひとつかけらもなく、逆に珍しいらしい。

なんでもどんなに小さい量でも人間には霊力が、妖怪には妖力が、神には神力があるらしい。俺には全くないそうだ。

これは諏訪子の推測だが、俺の紫黒がその代わりを果たしているのではないかということ。

たしかにこれは俺が生まれつき所有していたものだし、その可能性はゼロではないのかもしれない。

話をもどそう、俺に霊力や妖力があれば、それを使って工夫をすることができ、けれども俺にはそんなもの全くないために紫黒を組み込むか、能力の使い方を一步変えてみるしかないのだ。

そんな選択肢のない状況でなんとか新しい力を見つけるのは、逆に簡単というべきか逆に難しいというべきか、もしくは素直に簡単か難しいか、それはわからない。

とにかく、俺が思いつく限りのパターンを試していただくだけだ。

諏訪子は自分の背中に冷たいものが通るのを感じた。

なぜだかはわからない、ただ神の勘が危ないと、そう言っているのだ。

思いつく理由は一つしかない、それは霧。

もしかすると目覚めた新しい能力はとんでもないものなのかもしれない、または使い方がわからずに全力で放てば……どうなるかはわからない。

諏訪子は本能に任せて逃げ出した。そしてその瞬間、黒く紫な炎がその場を包み込んだ。

諏訪子は一步遅かった時の自分を想像し、今度からはもっと離れようと心に誓った。

「これは……紫黒と同じ色の炎、つまり俺の能力でいいのか」

自分でも驚愕している、失敗を前提で繰り返していおた作業で成功を収めたのだから。

一度出してしまえばあとは楽だ、自在に炎が出せた。

遠くに避難した諏訪子の姿を確認し、炎をしまった後、手招きをした。
不思議と、すべてを飲み込みながら進んでいた炎は跡形もなく消え去った。

霧も炎も自在に出せる、けれども同時には出せない。もう少し練習すればどうにかなるのだろうか。

ともかく不自然なことが一つだけ、それは確かに燃え残った灰がその場にあるのにも関わらず炎だけが消えたこと。ますます自分の能力がわからなくなる。

しかしその思考は諏訪子の声によって中断させられた。

「いや、とんでもないものが眠ってたじゃないか」

「俺も驚いてるよ、ともかく新しい力と言うのは素直に喜んでおこう」

こんなに簡単に見つかってしまった俺の力、もしかすると俺もまだまだ成長する余地があるのかもしれない。

「じゃあさ、名前考えようよ名前、いつまでも無言で使うよりその方がいいでしょ」

「たしかに言われてみれば名前もつけてないな、たしかに不完全燃焼と言うか、名前があった方が使いやすいという気持ちはある」

「（だってその方が格好いいし）」

「（名前言った方が行くぞって感じが出るな）」

こうして俺の技の名前を考えることになりました、はい、時系列元に戻ります。

とまあ、神社のテーブルを神二人と吸血鬼で囲んで何を話しているのかと思ったらそんなことなんだ。けどまあ俺にとってはある意味死活問題でもあるわけだしな、これからずっと付き合っていくことになるわけなんだし。

「やっぱり紫黒とおんなじ色してるんだし、紫黒なんたらとかどうかな？」

「けどもねえ、まあそれはそれでいいんじゃないかな？」

こういう話し合いがだんだん適当になってくるのはおそらく必然であろう、だって実際に本人だつてつまらないんだから。

まあもつと自分の技に責任をもて、とか言われたらそうなんだけどさ、だって正直かつこいい名前があつたつて格好良く見えるのかは俺次第なんだろ？ 正直俺は何事も名前は二の次だと思っただ。

「思っただけどさあ、全部素直に紫黒にしちゃったらいんじゃない

ない？」

……なるほど！ シンプルだけどいいかもしれない。

「俺はそれでいいかもしれない、だってこれだって紫黒と同じ色なんだし、シンプルでしかもひとまとめにできるなら」

「なるほど、あくまで原点は同じ……私もそれでいいとは思っけど」

「じゃあ決定！ 霧の技は全て紫黒でくくられることになりました！」

はい、なんともパツとしない理由で俺の技の名前は決まったのでした、えっ何？ 前と変わってないじゃんって？ 別に俺は気にしないからいいんだよ。

なんともいえない微妙な空気になってるが、とりあえず決まったものは決まったんだ、本人の同意の上なんだからそんな微妙そうな顔しないで、二人とも。

しかしこの微妙な空気を取っ払う方法はただ一つ……

「ねえ二人とも、そろそろご飯にしない？」

今思い返せば、俺食事は自分一人で済ませてるんだよな、このときは本当に失念していた。

ええ、見事に悪い方向に進んじやいましたよ。文句あるんですか？

ともかく、俺はめでたく能力全般は紫黒と言う名前になった、と言うことで少し進展したことがある。

使い慣れた名前でも、やっぱり名前が付くと霧にしても炎にしてもイメージがわきやすい、これが固有名詞の力なんだろうか？ ともかく、何か形が決まったような感じがする。

名前を付けると愛着がわくというが、それに近いものであろうか？

縁側で諏訪子と話しながら考える。

「なあ諏訪子、俺の力って未知数じゃん、だからそのうち旅にでも出てみようかと思うんだ」

「いきなりどうしてそんなこと？」

「いや、ただ単に世界を見たいんだよ。自分がこれから過ごしていく世界がどんなものなのか、まあ単純に力を伸ばすという面でもさ」

俺もよくわからないんだ、自分がどうしてこんなこと思ったのかなんて。

「別に私は止めないよ、霧の好きにしたらいいさ。ただし、ここにいつか戻ってきてくれるんならね」

その言葉の奥の意味を、霧に理解することは不可能だった。おそらくはそのままの意味でとらえたのだろう。

「私も止めはしないさ、別に旅なんか男なら誰もが憧れるものなんだろう？ それに、霧の人生は霧が決めたらどうだい？」

「神奈子もそう言うってくれるのなら……そうだね、何か機会があれば本当に行こうと思う。まあそれまでは世話になることになるから、よろしく」

諏訪子が今日はもう寝ると言って無言で寝室へと向かって行った、俺は特に気に留めず、お休みと言った。

「)

「)

諏訪子は一人、布団の中で考える

後に残された霧と神奈子、先に口を開いたのは神奈子だった。

「もし旅に出るのなら土産は期待してるよ」

「期待されておくよ、まあ期待に添えるかどうかはわからないけど

さ

たった一言ずつの言葉で、お互いはお互いの意思を読み取った。それは二人だけの約束、けれども神奈子は諏訪子の気持ちは何となくわかっていた。

霧はわかっていなかった、それだけで、とても大きいそれだけでたった一つのとても重要なことだけは伝わらなかった。

「じゃあ私もそろそろ寝るとするかな」

「じゃあ俺はひとつ飛びしてくるよ、まあ長ければ何百年かはここにいるわけなんだから、そんなにすぐのことでもないしあせらず考えようよ」

「それもそうだ、じゃあ私は寝るからね、お休み」

俺が返事をする前に部屋の中に入って行ってしまった。

じゃあ俺はこの後も能力の練習とかしてみようかな。もしかするとこの調子でなにか新しく見つかるかもしれないし。

俺はついさつき炎を出したばかりの広場へと向かった、まあ徒労に終わるのかもしれないけれども。

俺も原作キャラには早く会ってみたいし、そのためには力をつけておかないと。世の中何が起こるかかわからないしね。

神をも悩ませる悩みは乙女の悩み

昨日俺はいつか旅に出る宣言を出した、とはいってもきつかけがあればの話だけだな、俺的には昨日の夜に思いついた、平安時代になつたら輝夜に会いに行くというプラン、とまあなんととも気の長い話だが、を立てている。まあ吸血鬼の寿命から考えるとそうでもないのかもしれないけれども、というか何年生きられるのかわからん。誰か教えてくれ。

とにかく、現在は弥生時代あたりなんだから……まあだいぶ遠いのは確かだ。

つまりそれまではここに腰を据えるということだ。要するにそれまでは二ト生活を満喫するってことさ。

しかしまだ日が昇っているうちに起きてしまった、俺は暗い部屋から出て行けないし、諏訪子や神奈子が来てくれないととんでもなく退屈なわけで、今は紫黒を使って等身大諏訪子作りに挑戦している。とはいっても念じるだけで大体はできるので、細かいところの調節だけ。

この際ゆっくり諏訪子とゆっくり神奈子……いや、本人たちの名譽とストレスメーターのために止めておくか。素直にこれで満足しよう。

でもちょっとだけ作ってみたり……
ゆっくりしていいってね!!

俺はなんだか嫌な予感がしたので作業を中断した、ともかく暇つぶしは等身大諏訪子で事足りるだろう。

縁側に座って、ため息をつく諏訪子に不意打ちで声をかけてみる。

「ねえ諏訪子、あんた霧に気があるんだろ？」

「ぶはっつ！　なんてこと言うのさ神奈子」

お茶を盛大に吹きだしたね、その反応は凶星なんだろう。見ててそれらしいとは思ったんだよ、霧がいつか旅に出るって言った時のリアクションとか他にもいろいろとね。霧は気がついていないみたいけどねえ、まあそんな経験なかったみたいだし、女の仕事をどう捉えてみたらいいかわからないって言われても納得はいくさ。

けど私の眼はごまかせないよ。

「霧のどこがいいんだい？」

「私にもわからないよ、けどさ、何か気になるんだよね」

それを世間では好きって言っただよ。

「いっそのことアタックしてみたらどうだい？」

「考えてはいるよ、けどきつかけがつかめないというかね」

「好機を逃したら一生回ってこないかもしれないのに、早めにすることに変わりはないね」

私達は神だけどき、考えることは人間と何も変わらない。こうやって恋の病に悩むのだって人間と同じなんだ。神だからって答えがすぐ出るってわけじゃない。

それに、難しい問題なのも本人はわかっているんだろう。理由はまとめきれないくらいにいろいろあるさ。それこそ文章に表しきれないくらいにね。

まあ私が口をはさんでいいかと言われても、微妙なところなんだけどさ、まあ応援はするよ、曲がりなりにもこうして話し合える立場にはあるんだしね。

同居人の幸せを祈るのは当然じゃないか？

「じゃあさ、神奈子は好きな人ができたらどうする？」

「私？ そうだねえ、とっとと告白ちまうかなあ、玉砕しても成立しても後悔はしないと思うさ」

「それは神奈子が強いからでしょ」

「弱音はいてんじゃないよ、いつもの強気な諏訪子は何処行ったんだい？」

聞いた話ではまだ出会ってから一ヶ月ほどしか経っていないらしいけど。本当にわからないものなんだね、それだけ霧の魅力があるのか、それとも……

とにかく、私が言ってもやれることはただ一つ。

「諏訪子は諏訪子で攻めなさい、そうしないと落とすたって意味がないからね」

私は返事を聞かないうちに退散することにした、今日も色々仕事は残ってるし、本当にうれしい忙しさだしね。

まあ二人の関係がどうなるか、気にならないわけじゃない。けれども私は自分と言う立場から、何をすればいいのかわかっているつもりだし、気長に構えるさ。

さて、変に諏訪子が固まっちゃわなきゃいいけどね、そんなことになつたら後味が悪いし。

何より私が一番気まずいじゃないか。

「はあ、どうすればいいのかなあ」

本当に心から思っていること。それは伝えるべきか、それともこのまましまいこんでおくべきか。

本当に迷うね、もし霧が受け入れてくれたとしても、それで霧を縛り付けちゃうようなことになっちゃうのだけは嫌だしね。

なんとかなるって信じるのは勝手だけど、信じられた結果は裏切る

のも勝手なんだ。どうなるのかなんて誰にもわからない。百パーセントなんて空想の産物なんだ。そんなものは、ただの偶然の産物で、現在の過程を示しているだけのものなんだから。それがいつ覆されるのかなんて、それこそ神にもわからない。それこそ私だってわからないんだからさ。

ほんとうにどうしたものか……

とのかく、今日は普通に接してみよう。そうやって少しずつ決めて行けばいいんだから。

確かに時間は長いようで短いんだけど。それでもなんとかできるところまではやってみようと決めただからね。

「おーい諏訪子、ちょっとこれ見てくれよ」

これは霧の声、ああそうだね、もう日が沈んでるじゃないか。私とすることがこんなことにも気がつかないなんてね。

とにかく普通に接する……それで何の用なんだろう？

振り返るとそこには等身大の私が出た。

「かなり上手に作ったつもりなんだけど……どうかな？」

「本人が驚くくらいに精巧にできてる」

ああそうだ。この調子じゃないか。焦らずになんとかして見せないとね。

なんだか諏訪子の様子がいつもと違ったような気がするけど……別に気のせいかな？

今はいつもの諏訪子なんだし、俺の気のせいであろう。そんなことに病む必要なんかない。

けども等身大諏訪子のクオリティーが高すぎる、これが紫黒の全力なんだろうか？

これはいろいろ試しがいがある、もしかすると戦闘にも応用できるかも知れない。いろんな形作れる方が便利だしね。

けども、一つだけ感じることもある。それは諏訪子から感じられる神力が最近減ってきているということ。どうしてだろうか？

ただ単に隠しているだけかもしれないし、他に理由があるのかもしれないけど俺には分からない。

まあ話したい時が来たら、俺にも話してくれるんだろう。余計な詮索はしないさ。

ただ……やっぱり私の力は減ってる、神奈子に信仰が行くようにな

って、私の信仰が薄れてきているんだ。
まだ減ってきているだけでなんともないけど、いつかは消えてしま
うかもしれない。

まあ本当に気が遠くなる話だけど……活動する力も足りなくなつて
寝たきりになるとか、それくらいにはなつてしまつだから。

時間はたくさんあるけど無限つて言うわけじゃないんだ、それなり
の覚悟は決めておくつもりだけどねえ。やっぱり思いを伝えるにし
ても早め早めがいいってことかな……

ただいつにしようかねえ、それだけが本当に悩みさ。
まあこればかりは自分に頼るしかないってことかな。

「諏訪子、なに魂抜かれたような顔してんのさ」

「ああ悪いね、ちょっと考え事してた」

「諏訪子らしくない、とにかく俺は今日も食事してくるから」

そう言つてまたどこかに行つてしまった。今から追いかけても追いつ
けないよねえ、だって普段一緒に飛ぶときだって向こうはだいぶ
抑えてくれてるんだから、やっぱり曲がりなりにも吸血鬼なんだね。

「神奈子、覗き見は良くないんじゃない？」

「なんだ、あんたのことを心配してやつてんのに。まあとにかくこ
の調子でいけば？」

「そうさせてもらうよ、まああなたの言う通りなのかもしれないしね」

二人は無言で見つめあう、言いたいことはそれですべて伝わったようだ。

「あゝ、どっかにとんでもなくおいしい血の鹿でも歩いてないかな」

そんな神×2の気持ちになんか全く気がついていない霧は、今日も今日とて獲物を探す。

「しかしなあ、本当に最近諏訪子の挙動がおかしいような気がするんだけど……別に早期にかけてるとそうでもないんだよなあ」

つくづく鈍感である、まあ彼の生涯はこんな体験とは程遠いものだったために、翔がないと言えましょうがないのだが。誰かを好きになってる暇があったら他のことをしなければ生きていけない様な生活だったのだから。

「うーん、確かかぐや姫って平安時代の話なんだし、それまでできるような暇つぶしでも考えないといけないなあ。なんか彫り物でもやってみるとか……いや、俺に会ってないし、紫黒の方が何かしていて楽しい。それよりは新しい能力見つけたほうがいいのかもしいないなあ」

とりあえず修行でもしてみるか、と勝手に結論を出しておく。実際それ以外にすることがあまりない。

せめてボードゲームの一つでもあったらいいのになあ、この時代でそんなもの要求する方がおかしいとは思うけども。今度紫黒で作ってみるか。以外に二人ともはまったりしてな。

しかし旅に出るって言ったって俺の飛ぶ早さは日本の北から南まで渡るのにもそんなにかからないんだから。本当に直ぐに戻ってこられるのも確かなんだ。

おっと、獲物発見、今日は熊で我慢しとくか……この時代に熊って贅沢なのかな？ 食べ終わったら毛皮だけにして近所の村にでも送ってやるか。親切な妖怪よりって感じでいいだろうか？ やっぱりご自由にお使い下さいとかでいいのかな？

俺は食事プラス贈り物を捕まえに急降下した。

翌日、熊の毛皮の服のオークションがあったのはまた別の話。

「神奈子、幸せってなんだと思う？」

「なんだい、いきなりそんなこと」

「いや別に、特に理由はないかなあ？」

寝る前に少しだけ話をする二人、別にどうってことない話だが、今の状況ではなんとなく意味のある話になるのではないか？ 特に恋の話の後からついてくるような話ではないか。

「幸せねえ、別に定義なんかないんじゃない？」

「そんなこといわれたら余計に分かんなくなっちゃうじゃん」

神奈子は笑いだし、諏訪子は妙にふてくされた感じになった。

「別に、そんなこと考えてたら何やっても幸せになんかなれないよ。そんなことよりもさ、もっと自分のことでも考えてみたらどうだい？ 全員が百パーセント幸せになるなんて無理なんだから」

諏訪子はどうやら余計にわからなくなってきたようだ、神だっつてこっついう時に悩まないことなんてない。むしろ神だからこそその悩みもあるかもしれない。

「考えるより行動したら？」

「まだ先になりそうだけどね」

まだ一方的な思いが、通じあうかどうかはまだわからない。
それはもう少し先の話なんだから

神をも悩ませる悩みは乙女の悩み（後書き）

え〜と、なんか最初の方が読みやすい様な気がしてくるこの頃です。本当に一話が一番面白いんじゃないか……？

次の話は、かぐや姫の噂が守矢神社まで伝わってくる程度に有名になったころまで話を飛ばしたいと思います。

平安京に行こう！ 的な感じで。

原作キャラもどんどん増やしていきたいと思えます。

吸血鬼と姫は互いに関係を結ぶ

時は平安、都からかぐや姫の噂が守屋神社にも伝わってきた。特徴からして輝夜に間違いないだろう。そして俺は都までやってきて、輝夜の屋敷を探している。

「多分一番賑やかなところだろう、となるとあっちかな？」

噂によると五つの難題はもう出してしまったらしい、少し残念。

えっ、守矢神社のほうはどうなったって？ そんなに知りたいか、じゃあ回想始めるぞ。

「というわけで、都に行こうと思います」

「あんたねえ……そんなに美人がいいのかい？」

確かに、これじゃあ誤解を招いてしまう。せめて俺がかぐや姫に会いたい理由を言わなければなるまい。

「実はさ、かぐや姫って俺のもといいた世界でも結構有名な話なわけですよ、それも千三百年後にもきっちり伝わってるくらい。てなわ

けでそんな有名人を見たいと思うのはあたりまえじゃないですかね？」

……嘘はついてないもん、東方のことには何にも触れてないけど確かに有名だもん、日本で一番古いんだもん、俺そう習ったよ。まあその後二千年くらいたったからどうなったのかは知らないけど。ともかく本当に有名なんだから。それに原作キャラだし会わないわけにはいかない！」

「まあいいんじゃない？ そんなに有名なら気になるなって言う方が無理があるんだし」

「それもそうだね、私は許可するよ。ただここにちよくちよく戻ってくるよ」

「わかった、じゃあ早速行ってくるよ」

そう言っただけ俺は縁側の方へと歩いて行く、もともと荷物なんかないんだしそもそも衣食住だって現地調達で間に合ってるんだ。本当に必要なものがない。

「じゃあそう言うことで頼むから」

「ああいうことだけは迅速だねえ、もう見えなくなっちゃった」

神社に残されたのは諏訪子と神奈子、あまりの行動の速さに呆れかけている。

そこで口を開いたのは神奈子、今まで何の進展もなかった乙女の悩み疑問を持つのは当然だ。対象がどこかに長い間いなくなるという

うのに、黙って見送ったのだから。

「いいのかい？ 行かせちゃまって」

「いいんだよ、強引に止めてもいいことはないんだし」

どこか清々しくも物悲しい顔で言いきった、ただ胸の奥はどうなっているのか？

それは本人もわかっているのかすらわからない。

「時間はどのくらいあるんだい？」

「うーん、力としてはかなり弱くなってるし。もう少して眠ることになるかもしれない」

だったらなおさら……そう言いかけた言葉を押しとどめる。

「やばくなったら連れてくるさ」

「なら私も手遅れになる前に協力してやるよ」

協定が結ばれた。

しかしなあ、都の夜ってもう少し賑やかかと思ったら以外にパツとしない。俺だつてもといた時代のレベルを欲求なんてしないから、もう少し華やかでいてほしかった。

ともかく、はるか上空から吸血鬼の視力頼みで探していると、一際大きな屋敷を見つけた。そこに輝夜がいると信じて急降下する、一発で当たったらラッキーだけど……

当たったんだなそれが。屋敷の周りにかぐや姫かぐや姫うるさい連中がいるんだもん。こんな夜遅くなのに熱心なことだ、俺は抜け駆けするけど。

輝夜の顔を一目見るために庭の木にとまって待機する、しばらくすると輝夜と……あれは召使いか？　ともかく二人ほどついている。輝夜は一度こっちの方を見た、ばれたかと思っただけど違うらしい。輝夜は召使いに「しばらく一人にさせて頂戴」と言い、下がらせた。しばらくするとおもむろにこちらを向いて……

「いるのはわかってるのよ、妖怪さん」

……ばれてましたか。まあとにかく顔くらいは見せないと失礼だな。

「ばれてた？」

縁側に座る輝夜の間に跳躍する、まったく驚かれないのは何でだろう？

「あなたの名前は何と言うのかしら、翼のある妖怪さん？」

「猫を被るのをやめてくれたら教えてあげてもいいけど」

輝夜がこんなおしとやかに話すわけがない、これじゃあ二ト姫兼カリスマ兼おてんば娘じゃなくてただの淑女だ。

「あれ、最初っからばれてるんだっつら言っつてよ。恥かしいじゃない。けどまああんた良く気がついたわね、私が普段淑女のふりしてるのってお爺様とお婆様と帝しか知らないっつ言っつのに。使用人も知ってる人がいるのかわからないのよ」

「それは光栄だ、数少ない秘密の共有者になれたというわけなんだから」

「まったく、いくら私の立場があるからっつてこんなおしとやかな淑女を演じさせられる身にもなっつてみなさいよ、絶対嫌気がさすわよ」
うっん、それは共感できる気がする。俺だっつてそんなことしてたらそのうち嫌気……いや、一日と持たず嫌になるだろっつ。

「けどまあ気に行っつてはいるんだろっつ？ t……この環境が」

危ない危ない、危うく地上がと言っつてしまっつところだっつた。そんなこと言っつたら怪しまれるどころじゃない。

「まあそうね……っつてなんでいつの間にかあなたの自己紹介から私の愚痴に話が変わっつてるわけ？」

確かに、いつの間にそんな風に……俺が猫かぶるのやめろって言ったからか。

完全に俺のせいじゃないか、まあそんなこと気にしてる感じもないし、別に問題はないんだろう。

「とにかく名乗っておこうか、俺は紅羽霧、もちろん偽名だ」

「私は蓬莱山輝夜、もうあんたは輝夜でいいわ」

「じゃあ俺は霧でいい。お近づきのしるしだ」

おお、なんだかんだいってもう他人行儀じゃなくなってきた、俺ってもしかしてコミュ力めっちゃある？ 隠れた才能、人とコミュニケーションを取ることで……自分で言ってる悲しくなってくるからやめよう。

しかし、原作キャラ三人目にも順調に会えたし、いつそのこと永琳が地上に来るまでここにしようかな？ そんで月の使者を追い払うのを手伝って、後々永遠亭で再開なんていうテンプレ的な展開を迎えて……よし、計画はばっちりだ。

けど輝夜って実際に会ってみると結構庶民寄りなお嬢様で、一緒にいても退屈はしなさそうだ。

「ところで霧は何で都に来たの？ 働きに？」

「俺は輝夜に会いにきた、というか働きのってなんだ？ 俺は妖怪だぞ」

なんで妖怪に向かって都に働きに来たのとかって聞いちゃうかな。

「知らないの？ 今の帝は妖怪にフレンドリーで、人間と共存する意思のある妖怪に都に住む許可を与えてるのよ」

……俺唾然、何それ？ 聞いたことないよそんなの。ウエルカム妖怪なの、何やってんの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？ けど俺にとっては好都合だよ。それって人間から隠れて輝夜と会う必要がないってことだよな？

「妖怪にしかできない仕事を引き受けたりしてるのよ、結構儲かるらしいわね」

「そりゃあ、妖怪様なんだろ？」

確かに妖怪にしか

「なんなら私から帝に話つけてあげましょうか？ 霧といると退屈しなさそうだし、私の所で雇ってあげてもいいのよ。ちょうど家庭教師が実家の母が重い病気にかかったって言って里帰りしてるから」

……話について行きません、けどまあ要するに輝夜は。私の所で雇ってあげるから、なんか面白い話でもして頂戴とか言っんですね？ わかります。

けどまあ俺にとってもメリットだらけなんだ。それなら受けてもいいかな、どうせ月の迎えが来るまでなんだし、それまで輝夜と過ごすのもいいかもしれぬ。

「とにかく、それならお願いしてもらっていいかな？」

「別にいいわよ、たしか丁度明日帝が来る日だし。お爺様とお婆様

にも話をつけなきゃならないわね」

それは……なんか面倒そうだな。

「お爺様〜お婆様〜ちよつと来て〜」

「そんな気軽に……もう少し気を使うとか」

そんな風に紹介される身になってみる。

ほら、なんて言ってる間に来ちゃったじゃん。二人ともなんか拍子抜けしたような何となく諦めたような表情してるけど……よめた、普段からこういうことあるんだろ。

「今度からこの人……じゃない、そういえば何の妖怪なの？」

「吸血鬼」

「今度からこの吸血鬼の人を家庭教師に雇うことにしたから」

率直だねえ、何となくいつもはどんな感じなのかわかる。我儘なんだかなんなんだか……

「あらすつ、だったらこれからよろしく頼みますね。吸血鬼さん」

「何が言いたいのかわかっています、普段からこんな感じでございます」

……おい。こんなに軽くていいのか？ まあとにかく、名乗っておかなきゃ失礼だ。

「紅羽霧と申します、今後ともよろしく願います」

えーと、この後のやり取りはかなりカオスなことになった、けども話はちゃんと通じてるんだよな。そこはさすがと言うべきか。

とにかく、いきなりの申し込みがなんとかなってしまうことに驚きを感じながら俺は正式にここに雇われることになった。

ここで働いている人全員に顔を通され、事情を察した人たちには工員を送られた。
けどまあここではこんなことは日常茶飯事らしい、どんな職場だよこじ。

さすがに俺みたいにいきなり雇われるって言うことはないらしいけど、お眼鏡にかなえば自然とここに働き口を用意されるらしい。

「家庭教師とはいっても、俺ができるのはたかが知れてるぞ」

「吸血鬼なんだから長くは生きてるんでしょ、色々昔話してくれるだけでいいのよ」

まあ、適当に俺がまだつけ狙われる前の話でもしておくか、それからここ数百年の話とか。

「じゃあよろしく頼むよ」

「まあ待ちなさい、本当にことが終わるのは帝に話をつけてからなんだから」

確かにそうだ、なんでも本来なら真つ先に帝に話をつけなきゃならないらしい。

今回はかぐや姫権限でどうにかするそうだけど……

「ともかく、私はあなたが気に入ったわ。せいぜい尽くして頂戴ね」

「言われなくてもそうするよ、姫様」

おたがいに冗談のつもりで言ったのはわかるのだろう。二人で笑っていた。

さてと、俺も昼間から起きる練習しなくちゃならない……とはいっても別に大丈夫だろう。

もともと半分は昼型だったのだから。普通に昼間に目が覚めるとかあったもんな。

「そういえばさ、五つの難題とかどうなったの？」

「あああれね、結構面白いことになってるわよ。まずね」

俺の新天地での生活、かなり幸先のいいスタートを切った。

この調子で幻想郷ができるまで進んでくれたらいいんだけどなあ。

こう思ってたらそうはいかなくなっちゃうのがあれなんだよなあ。

一種のフラグってやつ？ とにかく、これから輝夜の家庭教師が…

…ここにいる人たちは家庭教師と言う名の……とはわかってるらしいし。前の人もそうだったらしい。

まあ気楽にいかせてもらおうかね。

支配者全てが傲慢な理由などない

「いい、もうすぐ帝が来るから。先に私が話しておすからね」

「じゃあ俺はサイドに控えてれば問題ないんだな？」

「そういうこと」

しかし平安京に住み始めて二日で帝と対面するなんて、結構すごい体験だと思うんだ。

仮にも国で一番偉い人とただ長生きなだけの妖怪風情が会っちゃったりしてなんか後先不安になるな。

「ほら、噂をすればよ」

そう輝夜が言うと、何やら玄関の方から話し声が聞こえる。

この召使いの人が俺のことを説明してくれるそうだけど……なにやら笑い声が聞こえてくる。これはいいこととして受け取っていいのか？

なんてことを考えている間に、おそらく帝であろう人が入ってきた。黒と金が綺麗に合わさった豪華な着物を着ていて、顔つきは案外普通だが女受けはかなりよさそうだ。

輝夜と俺の顔を見た後、俺に向かって話しかけてきた。

「主が新しくかぐや姫に仕えたという妖怪か」

ふむ、やっぱりこういふところは普通の人なんだな。常識人っぽい

し、期待できそうだ。

「はい、紅羽霧と申します。ただ長生きなだけの吸血鬼であります
が、一応家庭教師と言う名のなんとやらと言う形で奉仕させていた
だいております」

……この時代の挨拶なんか知らないけど、これで会ってるのか不安
だ。
変な風に勘違いされたらどうでしょうか。

「まあそう畏まるな。どれ、詳しいことは酒の席で互いに腹を割る
うじゃないか。宴会の準備は出来ておる。霧殿も庭に出て盃を交わ
し合おうぞ」

うむ、この人もどっか抜けてる人だった。

先が思いやられるような………というか帝がこんな適当な人で大丈夫
なのか？ 平安京。

帝とかぐや姫と一緒に三人で宴会をするということのすごさをわか
っていただけのだろうか？ まず体験できない、というよりは最
早奇跡のレベルであるということとはわかるだろう。

けどまあ、まだ日が昇っているために俺だけ日陰にいるわけだが…
…なんか気まずい。

「ほれ、主も飲まんか」

「では頂戴いたします」

「そんな固くならんでもよい、聞けば二千の時を生きる妖怪だという話ではないか。むしろ畏まるのはこっちと言つものではないのかの?」

えっと、一応四捨五入したら三千になるくらいは生きてますけど…
…それでも帝にため口つてなかなか勇氣あるんじゃない? 輝夜は普通にやってるけどさ。

「そんなこと気にしなくていいの、別に呼び捨てでもいいんだから」

「その前に名前まだ聞いてないような……」

そういえば来てから直ぐ酒で腹を割ろうとかって言つてすぐに宴会になつちやつたから。名前なんて聞いてる暇はなかった。

「そこは素直に帝と呼べばよい」

「では帝、改めまして「普通に話そうではないか、その方が気楽でいいだろう」では帝、乾杯しましょうか」

俺達の宴会は夜まで続く……

とまあ、宴会が終わるころにはすっかり日が暮れて、俺の時間が来たわけだ。

帝ともすっかり打ち解けてしまった、今ではなんでもなんに畏まっていたのかがわからない。普通に友人と話すような感じまで発展してしまった。

聞けば都で働く妖怪は皆そのような感じらしい。帝曰く妖怪が働いてくれているおかげで街が成り立っている部分もあるし、それに妖怪たちの方が長く生きていて、その分知恵も力もある尊ぶべき者たちという考えらしい。

この時代から妖怪と人間の共存が始まっているのは俺的にありがたいことだ。

とはいってもそれは平安京だけらしいが。

そして俺たちは今、雑談タイムとなっている。

「なるほど、山が一つなくなるほどの力とな。だったら一つ頼みがあるのだがいいか？」

「何でしょうか？」

帝直々の頼みなんだ、何か重要なことに変わりはないのだろうか……

「実はの、ここは人間と妖怪が共存できている。けれどもそれを良く思わない妖怪たちもいるだろう。そのせいか妖怪たちを受け入れる制度が出来てから人が襲われることが増えてきているのだ。そのため力のある者たちが自然と必要になってきての。どうだ、陰陽

師の真似事でも初めてはくれるかの」

……要するに妖怪退治を手伝ってことだろ。まあ引き受けない理由はないな。

「わかりました、引き受けましょう」

「そうか、助かるな」

「けど私の暇つぶしにもちやんとつきあってよね」

「今自分で暇つぶしって言ったよね」

とにかく確実に楽しいことになっている、なんだかんだいってこの世界はおもしろい。

帝が帰った後は、二人で話すことになった。

「けどさあ、妖怪が妖怪退治って気分的にはどんな感じなわけ？」

「別に普通だよ、それに俺は元人間だし。噛まれて吸血鬼になったタイプだから天然モノの妖怪ではないからね。一心心は人間のつもり」

「そうだったのね、まあそこら辺の事情については後でみっちり聞いてあげるから覚悟しててね」

なんとも好奇心旺盛なお姫様でいらっしやいますな。

「それでも本当に俺の話せることなんて全然ないぞ」

こっちの世界で大体八百年、そして元の世界でひきこもってなかった年月は二百年くらいだ。実質人生の半分以上をひきこもっていた感じになっちまう。まあそれでもしばらくは時間も稼げるし、今は未来の遊びでも教えてやるか。

「そうだ、俺が昔住んでた世界の遊びでも教えてやるか？」

「昔住んでた？ それってどういうこと？」

ああ、そういえばこの話もしてなかったっけ。

「とりあえず面倒だから後回しにしたい、とりあえずパーっと遊びたい気分なんだけど」

「奇遇ね、私もなのよ」

「だったら決まりだ、ちょっと道具を作るから待っていてくれ」

紫黒の使い道は無限にあるのさ！

とりあえずチエスを教えております、けども一発でルールを飲み込んでしまうのはさすがと言うべきであろう、月の民は皆がこんな感

じなんだろつか？

とりあえず既に勝負は始まっている。初めてなのになかなか上手だから困る。

どちらも色が同じなので若干見ずらいが、そこは片方の駒にリボンをつけて見分けている。

それよりも見ずらいのはチェス盤本体だ。マス目がわかりずらいが、そこはお互いになんとかやっている。

改めて月の民の頭の良さを再確認するよ、地味にこつちが劣勢だ。

まあここから逆転するのが俺のいつものパターンなんだけど。なんでもできちゃうのかはわからない。

伊達に数百年やってねえよ、最近だって諏訪子と神奈子と一緒にやっていたし。腕は鈍っていないはず。

まあ結果的に勝利したわけですけども、しかし輝夜が自滅してくれなかったら俺が負けてたかもしれない。今度から俺の面目との戦いにもなりそうだ。

そしてまあ自然と第二回戦へと向かうわけですね。

「チェックメイト」

「なかなかやるわね、けど次は負けないわよ」

これは俺が負けるまで続くフラグだろうか？　そこで結局最後まで勝ち続けて諦めて……

なんて甘くはないと思っけどな。

そっいえば明日からの予定何にも決まっていなんだよな。まあ行き当たりばったりでやっていこうか。

支配者全てが傲慢な理由などない（後書き）

警告「作者は竹取物語に詳しくありません」

どうか間違ってたらごめんなさい。

しかも今回短いというね、長い間空けておきながら。

間があいた理由としては、定山溪に旅行してきました。温泉入ってきました。広がった。

あと初めて、バトンに挑戦してみました。もしよかったらもらってください。

箱入り娘は籠の外をどう見るのか

「ネタバレしてもいい？」

「いいわ、もう全くわかんない」

「注目するべきところは一つだけだよ、なんでKはRがどうやって殺されたのか知ってるの？ 公表されてもいないのにその時は関係者でもないKが知ってるはずないよね？」

「じゃあKが犯人で……わかった、Tがグルなわけね！」

「そういうこと」

……何の話をしてるのかって？ 俺は昨日の夜に、俺はとある推理物の話をしたんだよ。明日の正午までに謎が解けたら新しい遊びを教えてあげるって言って。

けどまあ最終的には分かんなくて俺が種明かししたってこと。

けどまあこういう話だけは俺豊富に持つてるからなあ。ありがとう2ch、俺がひきこもる前にいろんなネタを学ばせてもらったぜ。

しかしまあ、いつかはネタ切れするだろう。

けど輝夜と帝が親しくなってから約二年が経つという、竹取物語と同じように話が進むならあと一年で月から使者が来るということだ。それまでの間に持っている話を全部出しつくす覚悟で行けばいいだろう。

けどまあ今回も俺が関与したところで歴史は変わらない。だから俺は存分に輝夜の手助けをしまっただけで構わないわけだ。

不謹慎だがなんだか楽しみになってくる。

俺が輝夜のところで住み始めてから大きく変わったことが一つある。俺たちは、最早家庭教師と生徒と言う関係ではなくなってきた、互いに親友と言うか、それに近いものとしてお互いを見るようになってきた。

おそらくは俺の出生や今までの人生の話をしたあたりからだろう。けども、輝夜は同情などではなく、俺の生き様を知って俺に近づいた。というような感じで話しかけてくれる。

正直それが一番ありがたい。下手に同情される辛さは、経験者がそれを理解する人にしかわからないんだ。だから特別に何々してあげましようが一番嫌なんだよ。

特別扱いされる側の気持ちがあわっている輝夜は、その点をわきまえていた。おそらくは同じような思いをしてきたのだろう。

結論。こんなようなことを朝から正午までできる俺らの暇人度はどうでもないと思う。

そして若干太陽が下ってきたころ。いきなり思いもよらないことを輝夜が言ってきた。

「ねえ霧、私町の中を歩き回りたいんだけど」

「いきなり何を言っている」

それは無理な話だろう、かぐや姫だつてばれたら大変なことになる。大騒ぎどころではないだろう。

それに今は昼間だ、俺だつて輝夜を連れて逃げ切れるかわからない。

「だつて私、なんだかんだいって一度も街を自由に歩き回ったことなんてないのよ。霧の話聞いてたら外への好奇心がどんどんくすぐられるじゃないの。それに霧がついてるでしょ？」

「それでも無理なことは無理、それに自分が真昼間からであるいたら騒ぎが起ることくらいわかってるだろう。俺だつて昼間から輝夜を抱えて逃げ切れる自信はないぞ」

まあこのくらいで諦めてくれる性格はしていないだろう。俺だつてそのくらいわかっている。

まあ誰だつてひと月ここで暮らせばわかる。そこで思いもよらない発言をしてきた。

「だつたら夜に出歩けばいいじゃない」

……余計に危ないってことわかってますか？

結局、お爺さんお婆さん召使い俺その他で説得したが頑固拒否され。俺が警備役になってしまった。

あまり人がいると目立つから腕が立つ俺を一人だけつけるといふことだ。夜だったら俺k輝夜を連れて逃げられるしな。

「決定ね！」

そして輝夜は夜まで寝ると言って寝室に行ってしまった。

結局一番面倒な役を押し付けられたわけか……

そして夜、輝夜も結構庶民的な服装をしてカモフラージュ。

俺はいつもと変わらない格好で輝夜の周りにつく、その際は俺の方が目立ってしまう気がするがあいにく俺は和服を着て性能が十分出せるほど着慣れていない。

別に奇抜な服装の妖怪も多数いるとのことなので大丈夫だろう。

もしもの時のために、かぐや姫であることの証明書を書いてもらった。

たしかに人間と妖怪が一緒にいるところを見たら、俺のことを知らない陰陽師どもは怪しむであろう。賢明な判断だ。

まあ大抵の陰陽師に知られているくらいには仕事はしているが。な

んでも都を襲ってきた妖怪一味を退治したところ、その中に名の知れた大妖怪が入っていたらしくてそのおかげで俺の評判は鰻登り、一般人でも知っている人は名前ぐらいはわかる程度にまで来た。

「ほら何してるの？ 早く行くわよ！」

「はいはい、あんまりはしゃぎすぎるなよ」

無事に帰ってこれるといいなあ。

大きな通りを輝夜と歩く、後ろ姿は見た目相応の子供のようで少し可愛らしい。これは別に俺がロリコンと言うわけはなく、ただ単に無邪気さと言う意味だ。勘違いするなよ。

「ねえ、あれは何？」

飲み屋はまだ早い……けど宴会とかでは普通に酒飲んでるしなあ。さすがに飲み屋に特攻させるのはまずいだろうし……

「飲み屋だな、金出して皆で酒飲んで騒ぐところだ。まあ宴会場とかと同じ考えでいいだろう」

けどもきちんと一言つける。

「ここよりも他のところでも見て回ったらどうだ？ 屋敷の中じゃできないような事の方がいいだろ」

「そうね、そうするわ。じゃあ他のところに行きましょ」

若干声が大きいが……まあいいだろう。

さてと、次にお眼鏡にかかるのはどこかな……

輝夜が足を止めたのは、小さな団子屋の前だった。

「ねえ、ここはどんなところ？」

「団子屋だ、まあ名前通りのものだけ……」

というかそれ以外に説明しようがないだろう。

「ちょっと寄って行っていい？」

「別にいいけどさ」

勘定は輝夜持ちなんだし自分で決めたらいい、小づかい預かってきてるみたいだし。

まあいざとなれば俺が出してやらないこともないけど……一応陰陽師の真似事して稼いでるわけだし。

輝夜だって注文の仕方くらいはわかる、俺も何か食べようかな。俺も最近屋敷の方で出される料理も食べてたから、和食も食べられるようにはなっている。

主食血液でやってきたためになかなか食べられなかったけどな。

「ほらお嬢ちゃん、あんみつ団子」

「ありがとう」

うん、幸い気がついてはいないようだ。まあかぐや姫って言ったって一般の人たちは毎日見られるような存在ではない。顔を見ただけじゃわからない可能性も十分あり得る。

まあそこは名が有名すぎるのが吉と出たか。

さて、まあとにかく輝夜にもしばらくは子供の時間でもらうとするかね。

静かな水面を波立てる一石は

こういう高い身分で、なかなか外に出られない人ってというのは、やっぱり外に憧れをもつものらしい。

そして外に出るとなんと嬉しそうな顔をするという。お供しているこちらが幸せになれそうな笑顔だ。輝夜もなかなか外に出られないことによほど不満を持っていたと見る。

こうして一通り見て回ったが、少なからず物足りなさそうな感じがするな。まあ幻想郷ができるまでの辛抱だから、そこまで遠く……いや、十分遠いな。あと何年も何年も待たなくちゃならない。

とまあそんなことを輝夜の背中を見ながら思う俺であった。

これから屋敷に帰るところである、特に問題も起きず、かぐや姫だとばれることもなく、お忍び旅行としては大成功と言う結果「鬼だ！ 鬼が来たぞー！」というわけにはいかなかったらしい。

鬼が来た？ わざわざこんな時間に攻めてきたってこと？ そんな夜襲なんてしないで白昼堂々襲ってきそうだけどなあ、鬼は。夜襲なんて卑怯マネなんかしない！ とかいつて。

ともかく、俺も陰陽師の真似事をしているんだし。行かないわけにはいかない。

ともかく、いそいで輝夜を送ってしまおう。

「ねえ霧、鬼が来たって言うけどどうするの？」

「輝夜を屋敷まで急いで送って直ぐにいくよ」

そういつと俺は輝夜を抱きかかえて……。

「えっ、ちよつとなんなのよ!」

そのまま飛んだ。

はじめのうちは輝夜も嫌がっていたけどだん景色を楽しむようになってきた。

これは近いうちに空を飛びたいって言いだすかも知れない、覚悟しておかないとな。まあ俺のできる限りのことは教えてやるが……俺は翼で飛んでるしなあ。

「空からの眺めはどうだ?」

「最高ね、私も自分で飛んでみたい」

「そうか、けどももう屋敷についたぞ。ここでお別れだ」

「そう、残念ね」

俺は地面に降り、ちよつと玄関にいた召使いに輝夜を預ける。

召使いの人は面喰ってるが輝夜が説明するだろう。

さて、俺はどこに行けばいいのかな? とりあえず帝のところに行けばどこで何が起きてるのかわかるだろうけど……

そう思つちや否や、俺は帝の屋敷へと飛び立った。

帝のところの陰陽師知り合いに話を聞いたところ、都の南門から堂々と突入してきて、こちらへ向かってきているらしい。なかなか力が強く、いまから俺を呼びに来る予定だったそうだ。これは好都合だな。

ともかく俺は、南門の方へと向かうことにする。

そして、その鬼を見つけた時にはもう既に門と帝の屋敷のちょうど真ん中あたりであった。

なるほど、なかなか力の強い鬼だな、これなら陰陽師たちが苦戦しているのもわかる気がする。ざっと千年は生きているだろう。それくらいの妖力が伝わってくる。

さて、こんかいは家屋の被害まで気を使ってる余裕はあるかな？

ともかくやるしかない、俺はその鬼に向かって急降下し始めた。

「まだ増援はきてくれぬのか!」

「早くしてくれ！ 救護班はこっちもたのむ！」

現状はひどい有様だった。破魔矢やお札などが全く効果がなく、一方的にこちらが数を減らされている、これではほとんどの陰陽師はいるだけ無駄であろう、むしろ遠くに行ってもらって、他の仕事をしてもらった方が助かる。

ともかく、俺が行かなければ話にならないだろう。少なくとも俺だって年齢の分の力はあるつもりだ。それ相応の戦いはできる。それに今は夜だ、夜の吸血鬼を舐めてもらっては困る。

「おい、大丈夫か？」

吹っ飛ばされてきた陰陽師の一人に声をかける、俺はこいつを知らないがこいつは俺を知っているらしい。俺も有名人になったもんだ。

「霧さんじゃないですか、お願いです、あの鬼を止めて下さい」

「わかってる、そのためにここに来たんだから。他の陰陽師にも伝えてくれ、他の陰陽師たちは撤退、その後住民たちの避難の手助けに専念、帝やかぐや姫も安全な所へ。攻撃から守り切るくらいなら十分にできるはずだ」

伝えるべきことは伝えた。これで俺の心配事はなくなる。

「撤収」

他の陰陽師たちが、俺の姿を確認した後、納得したような表情にな

つて四方八方に逃げ去っていく。そんなに俺が戦う時にそばにいるのが怖いか？ たしかに半径三十メートルは危険区域になるけどさ。

ともかく、鬼の方も俺に目をつけたらしい。ここからは真剣勝負だ。

「なんだ貴様は、妖怪ごときが俺に勝てるとても思ってるのか？」

「思ってるさ、だって俺はただの妖怪じゃないんだから」

？紫黒 ？

俺は紫黒を大剣にする、おそらく鬼の力と打ち合うにはこれくらいは必要だろう。いくら紫黒が頑丈でもレイピアで鬼の拳は受け止められない。念には念をだ。

「夜の帝王の力を見せてやる」

「おもしろいじゃねえか、かかってこいよ。さっさとぶっ飛ばしてあんたらの帝んとこまでいかせてもらっぜ」

やはり狙いは帝、今立てた俺の仮説は人間と妖怪の共存に異議を唱える者。おそらく単騎出陣してきたのだろう。

鬼が何か策を立てるほど小作なマネをするほど落ちぶれていないことに駆けるしかない。まあ協力者に他の妖怪がいたら話は違っがな。

ともかく、俺のすることは目の前の鬼を倒すことだけ。

「おっと、そういえば名前を聞いてなかったな、俺は金津 力道。これから帝をぶっ殺して都の人間を襲わないなんてほざいてる鬼た

ちを変える男さ」

「なるほど、俺は紅羽霧。お前をぶっ倒して都の平穩を取り戻す男だ！」

無駄にかっこよく決めてみたけど、これで負けたりしたら恥ずかしいよな……

まあ気を引き締めていこう。

「こっちからいくぜ」

拳と大剣がぶつかりあった。

力はお互いに拮抗している、さすが鬼だ。年齢差をものもしない荒々しさがある。

俺だって小細工に関しては負けるはずがないが、というか力以外は負けたくない。俺のプライド的に。まあだったら力でも勝って話だが……

二回三回と打ち合っているうちに、だんだんこっちが優勢になってきた。けれどもさすがは鬼、なかなか決め手が入るほどにならない。これは長くなりそうだ。

そしていったん間合いをとった、間の距離は10mほど。

そしてお互いに感じ取った。？相手は本気で終わらにかかると

?

静かな水面を波立てる一石は（後書き）

新年あけましておめでとございます。

いやー今回の年越しはメイプルストーリーでした。
楓鯖はきのこ神社であけおめいぶるです。

新年一番の作品は二千字くらいでみじかいですけど……まあ許してください。

また今年一年よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5449z/>

東方吸血鬼

2012年1月1日00時50分発行